

# 宋代募兵制の研究 要旨

齋藤忠和

## 目次

序文

第一部 軍法

第一章 『武経総要』に見える宋代軍法の条文について

第二章 階級法

第三章 宋代の軍法について

第二部 剩員・帶甲剩員制

第四章 北宋の剩員・帶甲剩員制

第五章 南宋の剩員制について

第三部 募兵制論へ

第六章 兵制からみた徽宗時代の地域社会

第七章 兵士はどこへ行くのか～禁軍兵士への保障からみた北宋募兵制の一側面～

第八章 漏沢園が語る徽宗時代の下層兵士たち

第四部 総括と展望

終章 募兵制と宋代の社会—総括と展望—

第五部 附録

附録1 『守城録』索引

附録2 『武経総要』前集項目図版索引

附録3 北宋熙寧初禁軍配置表

附録4 北宋前半期の騎軍に関する一試論

附録5 陳堯叟伝への序章

附録6 描かれぬひとびと

あとがき

初出一覧

## 要旨

### 1 ; 問題意識

「宋代の兵制は募兵制を原則とする。すなわち、軍人として飯をくうという形態である。」

伊原弘氏は宋代募兵制とは何かを端的に語る。

しかし、こうした理解から一步踏み出し、「兵士(軍人)として飯を食う」とはいかなることかを示そうとすると、これまでの宋代兵制研究では、十分に説明できないのである。

「兵士(軍人)として飯を食う」ということは、兵士として長期的に生活して行くことであり、そのためには職業としての兵士が成立していなければならない。すなわち兵士となった者たちの生活を、生涯を通じて支えうる制度が整えられていなければならない。

また、「兵士(軍人)として飯を食う」ということは、平時に於いても常時雇用し続ける

ことである。したがって常に彼らを権力の側に置き、平時には治安維持などにあたり、ともに有事に備えて訓練を行い、戦時には有効な軍事力を発揮することが求められ、王朝は常に軍隊を一元的に管理しなければならない。

最大の暴力装置である軍隊を一元管理するための根本法規が軍法である。軍法と呼ばれる法は、古来より存在してきたが、本稿では、宋代軍法について、階級法を含めて、その全容を明らかにするとともに、軍法が示す王朝の暴力の一元管理に向けての姿勢を読み解き、募兵制を支える支柱の一つとしての宋代軍法の全貌を明らかにする。

さらに、剰員・帯甲剰員制をはじめ、軍隊という巨大な社会を取り巻く人の流れの出口部分を解明することで、「兵士(軍人)として飯を食う」ことに関して、一部ではあるが、その内実を具体的に示し、募兵制とは何かという素朴な問いに、些かなりとも回答を示したい。

したがって、本稿は、個別部隊の特色を明らかにしたり、それらの変遷を整理したりしようというものではない。また、宋の戦術や戦略について語ろうというものでもない。禁軍を中心とする軍隊を、宋代における一つの社会集団ととらえ、それが宋代の社会においてどのように位置づけられ、機能したかを探ることで、募兵制の全貌に迫ろうとするものである。言い換えれば、軍隊の社会的な考察、すなわち兵士の側からの考察でもある。

これまで多くの人びとは、宋代を、皇帝を頂点とする科挙官僚による整然とした官僚機構を持つ文治国家であると認識してきた。しかし、唐代後半の藩鎮体制から、五代十国を経て、宋代の君主独裁官僚制への変化が劇的であり、また、宋代社会の指導層が科挙官僚であったため、武官や兵士はその実態以上に軽視されてきた。その結果、我々は、宋が最盛期には百万を超える軍隊を擁し、国家財政の8割を軍事費が占めた軍事大国であったという事実でさえ、失念しがちである。

確かに、日本の宋代史研究は、歴大な成果を蓄積してきた。しかし、兵制研究に関しては十分な深化と拡大は見られなかった。これまでの宋代兵制研究は、政治や経済の諸問題を考察する必要から軍隊に論及するケースが多く、兵制そのものを、言い換えれば軍隊や兵士を直接の研究対象としたものは少なく、軍隊そのものや軍隊の内部からの考察はこれからである。

ただし、中国・台湾においては、とくに1980年代以降、『中国軍事史』(第1巻~第6巻・附巻、中国軍事史編写組編、解放軍出版社1983~91年)・『中国古代戦争戦例選編』(第3冊、同編写組、中華書局1984年)・『中国兵制簡史』(陳群、軍事科学出版社1989年)・『宋元戦史』(李天鳴、食貨出版1988年、全4巻)・『中国軍事通史』(軍事科学院主編、軍事科学出版社1998年、全20巻)・『中国軍事史』(藍永蔚他、華東師範大学出版社2001年)・『中国戦争史地図集』(中国人民革命軍事博物館編、星球地図出版社2007年)など、宋代軍事史に関わるいくつかの成果が出版され、また李華瑞氏は、北宋・西夏関係を考察する中で、宋軍について述べられた(『宋夏関係史』河北人民出版社1998年)。また、宋代兵制全般に関しては王曾瑜氏が『宋朝兵制初探』(中華書局1983年)、その増補版である『宋朝軍制初探』(中華書局2011年)を刊行しているが、「募兵制とは何か」という問いに対する回答は充分ではない。

さらに、北宋以上に手薄であった南宋兵制に関しても、いくつかの研究がある。黄寬重氏は、『南宋時代抗金の義軍』(聯経出版事業公司1988年)で、南宋初期、金との戦争の

中で生まれた義軍について、その成立からそれらが果たした役割に至るまで、詳細に考察された。また同氏は、『南宋軍政与文献探索』（新文豊出版公司 1990 年）において、南宋兵制及び反乱の個別事例を論じられた。さらに何忠礼・徐吉軍両氏は、『南宋史稿』（杭州大学出版社 1999 年）において、南宋時代の軍事制度全般および金との戦争について述べられ、劉馨琚氏は『南宋荆湖南路の変乱之研究』（国立台湾大学出版委員会 1994 年）で荆湖南路の地方兵制に関して述べられている。また、王曾瑜氏は、『岳飛和南宋前期政治与軍事研究』（河南大学出版社 2002 年）で、岳家軍を中心に高宗期の兵制についてまとめられている。

このように、中国や台湾においては、相当量の研究成果が出現してきているが、これらは、戦略・戦術論に重点が置かれるものも多く、兵制や、兵士に関する研究も、総花的な著述が目立ち、ある程度全体像を把握しうるものの、なお考察すべき点が多い。

日本においては、小岩井弘光氏が剩員問題や就糧禁軍・老兵の問題などに取り組みられてきたことが、近年における最大の成果であろう。小岩井氏は、積年の研究成果を『宋代兵制史の研究』（汲古書院 1998 年）としてまとめられた。しかし、なお、宋代兵制の全体像を提示し、また募兵制とは何かという最も根本的な問いに答えるには至っていない。こうした傾向は、畑地正憲氏の『宋代軍政史研究』（北九州中国書店 2012 年）も同様である。

なお、久保田和男氏が、宋代開封の研究に関連して、禁軍軍営の位置や数・治安維持と夜禁、在京禁軍数、就糧禁軍などについて述べられてきた諸論考を『宋代開封の研究』（汲古書院 2007 年）にまとめられたほか、大室智人氏が戦略・戦術論的な観点から「北宋時代における西北辺の防禦拠点について」（『アジア史研究』第 30 号、白東史学会 2006 年）、與座良一氏が「北宋の将兵法について」（『東洋学報』第 91 巻第 9 号 2009 年）、伊藤一馬氏が「北宋における将兵制成立と陝西地域一対外情勢をめぐって一」（『史学雑誌』第 120 編第 6 号 2011 年 6 月）などの論考を發表され、いまようやく宋代兵制研究が動き出してきたように思う。しかし、現状では、北宋軍事力の中核である禁軍でさえ、その実態はなお不分明であり、「軍人(兵士)として飯を食う」者たちが、どこから来てどこへ行くのか、兵士の生活やその生涯、軍隊という社会集団と民衆の社会との関わりなど、募兵制の根幹たる部分でさえ、不分明な点が多い。

だが、宋代兵制の全容を解明すること、とりわけ禁軍を頂点とする宋代軍隊の社会的性格の解明は、宋代史研究の重要な課題である。先述したように宋は軍事大国であり、軍隊はそれ自体、大きな社会集団・階層であった。同時に、農民をはじめ様々な階層から供給される社会の異分子を吸収するため、官僚と共に君主独裁政治を支えるべき軍隊が、本来の役割とは別に、配軍(犯罪者を廂軍に配属)・盗賊集団の招安などによって彼らを吸収するなど、社会を安定させるための安全装置としても使われた。したがって軍隊を精査せずして、宋の全体像を理解することは難しい。

## 2 ; 本稿の概要

本稿では、軍隊を管理・統制するための基本法規である軍法の研究と剩員・帶甲剩員制をはじめ、軍隊という巨大な社会集団を取り巻く人の流れの出口部分について、以下の通り考察を進めた。

第一部は軍法である。宋代の軍法については、王曾瑜氏が『宋朝兵制初探』において、軍法の項目を立てて論じているが(300~304 頁)、階級法が軍隊内の上下の規律を定めた最

も重要な軍法であるとしたうえ、『武経総要』前集巻 14「罰条」にあるいくつかの規定を紹介しているに過ぎない。さらに、律との関係についても説明がないなど、なお追求すべき点が多い。また陳群氏は『中国兵制簡史』（軍事科学出版社 1989 年）において、逃亡法についてのみ略述されている(235~240 頁)にすぎない。こうした状況は、『中国軍事通史』（前出）・『宋朝軍制初探』（前出）を得ても変わらない。

本稿の軍法研究は、軍隊統制のために精緻な規則が整備・運用されていたことを示すとともに、軍法と常法との関係から軍隊社会と民衆社会との関わりや差異についても言及したもので、その運用も含めて、宋代軍法の全貌を示した。

第二部は、剩員・帶甲剩員制である。募兵制と言われる宋の兵制において、軍隊に身を投じた兵士の行く末はどうなるのかという、素朴な疑問から、王曾瑜・小岩井弘光両氏の剩員制研究を基礎に、その全貌を明確化した。剩員・帶甲剩員制は、王朝にとっては社会の安定と予備役的な戦力の確保となり、兵士にとってはもしもの時の保障となるもので、宋代募兵制の特徴を端的に示すとともに、基底部において宋代募兵制を支える重要な制度であることを解明した。

第三部は、募兵制論である。剩員帶甲剩員制を含め、軍隊社会の出口部分について、包括的な理解を示すことで、「募兵制とは何か」という根源的な問いに対する若干の回答を試みた。そこでは、剩員・帶甲剩員となった兵士たちが最終的にどこに行くのか、また剩員・帶甲剩員とならなかった兵士たちはどこに行くのか、を考えた。その際、公共墓地である漏沢園にも注目し、さらに北宋南宋交替期の戦闘や兵士の姿を記録した貴重な記録でありながら、これまでほとんど活用されなかった『守城録』を用いて考察した。その結果、北宋募兵制とは何かという根源的な問いに対して、僅かながら回答しうる所にまで辿りつき、軍事大国でもあった宋の一側面を示すとともに、宋代社会の特色についても言及した。

第四部は、総括と展望である。本稿の到達点として、募兵制とは、「多くの制度によって構成される複合的な制度であり」何かについて総括し、西欧の軍隊との比較から、北宋禁軍の近代性を改めて示した。

第五部附録は、宋代募兵制を取り巻くその他の課題に関する論攷等と、兵制研究の基礎となる索引・データを収録した。

附録 1 は『『守城録』索引』である。同書は、北宋南宋交替期における地方都市、およびそこでの兵制・軍事の状況を伝える貴重な史料であり、本索引により利用の利便性が大幅に向上した。

附録 2 は、『『武経総要』前集項目図版索引』である。同書の史料的な価値については説明を要しないが、項目・図版のみとはいえ、利用の便を格段に向上させた。

附録 3 は、「北宋熙寧初禁軍配置表」である。宋代禁軍各部隊の全貌は未だ明らかではないが、本表によって西夏戦終結後一段落した時点での、極端に北部に偏った禁軍各部隊の配置状況が読み取れる。

附録 4 は、「北宋前半期の騎軍に関する一試論」である。宋代のマルチ・ステイト・システムの中で、巨大な軍事力を有する遊牧国家と対峙しつつ、騎軍充実を図りながら、それを十分に達成できなかった宋の苦悩を物語る。

附録 5 は、「陳堯叟伝への序章」である。宋史陳堯叟伝を精読し、北宋前期、馬政の中心にいた陳堯叟の生涯を追うことで、馬がないという宋の騎軍の実態と、対外戦略の一

端を垣間見た。

附録六は、「描かれぬひとびと」である。清明上河図研究の一環として、画卷に兵士が描かれていないことから、宋代中国の社会構造を考察した。

### 3 ; 本稿の到達点

以上、本稿においては募兵制と総称される宋代の軍事制度のうち、軍隊を管理・統制するための根本法規である軍法と、軍隊という巨大な社会集団をめぐる人の流れの出口部分に関する諸制度を明らかにすることで、「募兵制とは何か」という、素朴ではあるが根源的な問いに対する回答の一部を示した。

本稿によって、募兵制の全容解明に向けて、今ようやく一步を踏み出したのである。

本稿は、宋が軍隊を一元管理するとともに、軍事力を最大限に引き出すために、厳格・詳細な軍法を定める一方で、褒賞規定を整備し、また兵士の生活を支え、軍事力を維持・統制するために、兵士に対して人生の終末に至るまでの各種保障制度を整えたことを示した。

兵士は、老齢となれば剰員や帯甲剰員として予備役的な職務に就き、また戦死・病死・戦傷・疾病などの際には、本人のみならず、家族や遺族も補償を受けた。もちろん、常にこうした保障がなされたわけではない。確かに、北宋・南宋交替期には多くの兵士が盗賊化し、南宋成立間もない頃には、浮浪者のような兵士もいた。西夏との戦争の後には、大量の帰農者を出した。しかし、王朝の崩壊と再建という異常時を除いては、比較的充実した保障制度の下、兵士やその家族たちは生活を維持することができた。ただし、彼らの暮らしはけっして豊かではない。とくに多数を占めた下層兵士の暮らしは厳しかった。漏沢園の被葬兵士たちが示すように、生涯家庭を持つことなく、孤独と貧困の中で死亡した兵士も多くいた。しかし、彼らでさえ、漏沢園という最後の受け皿が保障されていた。

このように、宋代の兵士は、中国史上はじめて「兵士(軍人)として飯を食う」ことができるようになったのである。

こうした、各種の保障制度は、府兵制においては不要であった。唐においては、自衛と国防が連続しており、そのため期間雇用の兵士が成立し得たと言える。

しかし、宋代は共同体の自衛組織を国防に転化することでこと足りるような段階ではなく、職業軍人による大規模な軍隊を擁し得る段階となっていた。しかも、「兵士(軍人)として飯を食う」ことができるような各種保障制度を整備し、少なくとも北宋時代を通じて運用し続けた。それは、期間雇用の(季節労働や年季奉公的な)兵士・軍隊ではなく常時雇用の、職業としての兵士であった。そしてこのような兵士の姿に、ある種の「近代性」を感じるのである。

一方で、本稿によって示した宋代禁軍のある種の「近代性」は、多分に筋書きだけが先行した仮構であるのかもしれない。事実、宋代の各種史料は、当時の社会の随所に暴力が溢れていたことを伝えているし、『水滸伝』に描かれた世界も、現代に生きる我々からすれば乱暴きわまりない行為が随所に見られる。しかし、たとえそれが仮構であったとしても、仮構の提示があるからこそやがて内実が備わる。さらに仮構を提示し、それを実現しようとするのと、暴力を野放しにして自力救済を当然とするのとでは、社会の成熟度は大きく異なる。すなわち、本稿において、兵制からみた唐宋変革が示されたとも言うる。

なお、本稿において、『武経総要』・『守城録』という兵書、漏沢園の墓誌などの出土史

料など、これまで中国史(宋代史)研究においては十分に活用されてこなかった史料も用いた。これによって、中国史(宋代史)研究の新たな可能性を示したとも言える。

#### 4 ; 今後の課題

本稿では禁軍を中心に募兵制を考察してきたが、それは、募兵制が第一義的には禁軍を対象とする制度であるからである。しかし、軍法の適用範囲は禁軍兵士にとどまらない。加えて、禁軍以外の兵種に対しても、述べてきた募兵制を構成する各種法規や保障制度が一部適用されていた。こうした点を精緻にたどることは難しいが、禁軍以外の兵種に対しても、今後、さらに検討して行く必要がある。

また、本稿においては、軍隊という巨大な社会集団の入口部分の検討は出来ていない。募兵制の全容を解明し、提示するためには、入口部分、すなわち「兵士はどこから来るのか」についての研究が不可欠である。「序文」に示したとおり、中国や台湾ではこうした課題にも言及する研究があるが、その記述は総花的で、今後一層追求する必要がある。

さらに、中国史の中で、宋代募兵制をどのように位置づけるべきかを考察しなければならないが、本稿においては、こうした課題にも十分に答えることができていない。また、こうした課題に答えようとした先学も少ない。

ただ、菊池英夫氏は、従来の見解を批判しつつ、中国史の三分論(古代・中世・近代)を基礎に、古代・中世の中国兵制を、概略以下のように述べている。

古代においては、氏族部族的な王の家産的軍隊が、国家の巨大化とともに拡大し、氏族部族的な徴兵権を首長が一手に担い、やがて氏族・部族の枠を超え、租税負担の一環として兵役を担わせる徴兵制を構築し、それがさらに巨大化して皇帝権の成立へ向かう過程で、皇帝の親衛軍が拡大する中、傭兵の使用を余儀なくされ、やがて、それが軍隊の中核となり、常備軍の主力となる。そして、こうしたことが可能となるためには王の家計から分離された官僚機構が成立していること、軍事的には工業生産が増大し生産技術が発達して軍隊編成が巨大化し、兵士が専門職化すること、さらに専門の兵士を養う経済力を持つことが必要である。

中世においては、領主の家産軍隊を基礎とし、私的な従属関係にもとづいて、軍隊が編成されていた。そしてこうした同心円的な構造が、直接依存関係のない農民に拡大され、徭役としての兵役を課すようになり、徴兵制が構築されてゆく。しかし、封建王朝が成長する過程で、家産的親衛軍として、家兵の延長線上に成長してきた準私属人としての傭兵が次第に拡大され、それが成長して他を圧倒してゆくことになり、こうした現象が生じるためには、やはり財源の集中と、財政機構の発達が必要である。

さらに、古代・中世ともに徴兵制と傭兵制を並置しているが、両者はともに世襲的屯田兵制に向かい、これが中国兵制の典型である。

軍事に加えて社会経済的要素を盛り込み、古代と中世封建社会における兵制の差異を明示した点では、「従来の理解」から前進したが、菊池氏の論攷は、その時代区分に従い、ここから 19 世紀以降の軍閥に移る。その結果、唐宋変革には触れず、宋代募兵制も中世封建社会における徴兵制から傭兵制への流れの中に埋没してしまっている。

尺度を設定し、法則を見出すためには、個別研究が蓄積されなければならない。しかし、

菊池論文から 40 年以上を経た現在もなお、十分とは言えない。ただ、本稿により、宋代の募兵制が、それ以前の各種兵制とは明確に一線を画すことを示した。今後さらに考察して行きたい。

#### 【主な参考文献】

- 伊原弘「河畔の民—北宋末の黄河周辺を事例に一」『中国水利史研究』29号、2001年。
- 伊原弘『宋代中国を旅する』NTT出版、1995年。
- 伊原弘編『「清明上河図」をよむ』勉誠出版、2003年。
- 伊原弘「徽宗とその時代 その再検討のために」『アジア遊学』64 勉誠出版、2004年。
- 伊原弘『中国都市の形象』勉誠出版、2009年。
- 伊原弘「宋代の道路建設と寄進額 - 寧波発見の博多在住宋人の碑文に関して - 」日本歴史学会編『日本歴史』626 吉川弘文館、2000年。
- 伊原弘「宋代都市における社会救済事業」、長谷部史彦編『中世環地中海圏都市の救済』慶応義塾大学出版会、2004年。
- 伊原弘『水滸伝を読む』講談社現代新書、1994年。
- 伊原弘『中国開封の生活と歳時』、山川出版社、1991年。
- 伊原弘・梅村坦『宋と中央ユーラシア』中央公論社、1997年。
- 衣川強ほか訳註『中国民衆叛乱史二宋～明中期』平凡社東洋文庫、1979年。
- 塩卓悟「唐宋人肉食考」洛北史学会編〈京都府立大学〉『洛北史学』第12号、2010年。
- 王晓波「宋真宗对遼戦争考之三 望都之戦」四川大学古籍整理研究所編『宋代文化研究』第10輯 綫装書局、2001年。
- 岡元司「南宋期浙東における墓と地域社会」岸田裕之編『中国地域と対外関係』山川出版社、2003年。
- 岡田宏二『中国華南民族社会史研究』汲古書院、1993年。
- 岡田登『中国火薬史—黒色火薬の発明と爆竹の変遷—』汲古書院、2006年。
- 何忠礼・徐吉軍『南宋史稿』杭州大学出版社、1999年。
- 韓志遠『中国軍事通史第13巻南宋金軍事史』軍事科学出版社、2005(1998)年。
- 菊池英夫「中国軍制史研究の基本的視点—封建制研究への一つのアプローチ—」歴史科学協議会『歴史評論』校倉書房、1971年。
- 吉田光邦「宋元の軍事技術」、藪内清編『宋元時代の科学技術史』朋友書店、1997年。
- 吉田光邦『中国科学技術史論集』日本放送出版協会、一九七二年。
- 久保田和男『宋代開封の研究』汲古書院、2007年。
- 宮崎市定「アジア史とは何か」『アジア史研究』第3、同朋舎、1975年。
- 宮崎市定「水滸伝」『宮崎市定全集12』岩波書店、1992年。
- 宮崎市定「宋元時代の法制と裁判機構」『アジア史研究』第4、同朋舎、1975年。
- 宮崎市定「宋代の太学生活」『アジア史研究』第1、同朋舎、1975年。
- 許保林『中国兵書通覧』解放軍出版社、1990年。
- 近藤一成「知杭州蘇軾の救荒策」『宋代の社会と文化』汲古書院、1983年。
- 金子泰晴「荊湖地方における岳飛の軍費調達—南宋湖広総領所成立前史—」宋代史研究会

編『宋代の規範と習俗』汲古書院、1995年。

金成奎『宋代の西北問題と異民族政策』汲古書院、2000年。

穴沢彰子「唐宋変革期における社会的結合に関する一試論—自衛と脈血の「場」を手掛かりとして—」『中国——社会と文化』第14号東京大学・中国社会科学学会、1999年。

古垣光一「宋代の官僚数について—真宗朝中期以降の人事行政上の新問題—」宋代史研究会編『宋代の社会と宗教』汲古書院、1985年。

荒木敏一『宋代科举制度史研究』同朋舎、1969年。

佐藤武敏『中国災害史年表』国書刊行会、1993年。

佐伯富「宋代における牢城軍について」『劉子健博士頌寿紀念宋史研究論集』同朋舎、1989年。

佐伯富『中国史研究』第二、同朋舎、1971年。

佐伯富『中国史研究』第一、同朋舎、1978年。

佐伯富『中国塩政史の研究』法律文化社、1987年。

三門峡市文物工作隊『北宋陝州漏沢園』文物出版社、1999年。

山内進『掠奪の法觀念史』東京大学出版会、1993年。

寺地遵「宋代政治史研究方法論試論」『宋元時代史の基本問題』汲古書院、1996年。

寺地遵『南宋初期政治史研究』溪水社、1988年。

周緯『中国兵器史稿』明文書局、1988年。

周藤吉之『宋代經濟史研究』東京大学出版会、1971年。

周宝珠『宋代東京研究』河南大学出版社、1992年。

小岩井弘光『宋代兵制史の研究』汲古書院、1998年。

小島毅『海からみた歴史と伝統—遣唐使・倭寇・儒教—』勉誠出版、2006年。

小島毅『中国思想と宗教の奔流』講談社、2005年。

小林高四郎・岡本敬二編『通制条格の研究訳注』第一冊、国書刊行会、1975年。

松井等「宋代ニ於ケル兵制ト社会政策」『東亜經濟研究』4-2、1920年。

松本浩一「葬礼・祭礼にみる宋代宗教史の一傾向」『宋代の社会と文化』汲古書院、1983年。

西奥健志「北宋の西北辺における軍糧輸送と客商」『鷹陵史学』27号、2001年。

青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』吉川弘文館、1968年。

石涛『北宋時期自然災害与政府管理体系研究』社会科学文献出版社、2010年。

拙論「『守城録』訳注稿(1)卷3-1」、『研究紀要』41北海道高等学校教育研究会、2004年。

拙論「『守城録』訳注稿(2)卷3-2(卷3了)」、『研究・実践報告』2立命館慶祥高等学校、2004年。

千葉熨「宋代の兵器工業」、『宋代社会經濟史研究(上)』、不昧堂書店、1960年。

曾我部静雄「宋代の軍人の強制徴集について」『歴史公論』6-3、1937年。

曾我部静雄「宋代軍隊の入墨について」『東洋学報』24-3、1937年。

曾我部静雄『宋代政経史の研究』吉川弘文館、1974年。

曾我部静雄『中国律令史の研究』吉川弘文館、1971年。

宋采義・予嵩「談河南滑県發現北宋的漏沢園」『河南大学学报』[哲学社会版]、1986年。

大室智人「北宋時代における西北辺の防禦拠点について」『アジア史研究』第30号白東史

学会、2006年。

大室智人「南宋初期の騎兵対策とその様態」『白山史学』第41号白山史学会、2005年。

大澤正昭『唐宋時代の家族・婚姻・女性』明石書店、2005年。

中国軍事史編写組『中国軍事史第3巻』解放軍出版社、1987年。

中嶋敏「西羌族をめぐる宋夏の抗争」『歴史学研究』1-4、1934年。

中嶋敏『宋史食貨志訳注三』東洋文庫、1999年。

張徳宗「宋代的禁兵制度」『宋史論集』中州書画社、1983年。

長井千秋「准東総領所の機能」『待兼山論叢』史学篇第22号、1988年。

長井千秋「南宋軍兵の給与」梅原郁編『中国近世の法制と社会』京都大学人文科学研究所、1993年。

陳群『中国兵制簡史』軍事科学出版社、1989年。

辻正博「宋初の配流と配軍」『東洋史研究』第52-3 東洋史研究会、1993年。

程民生『宋代物価研究』人民出版社、2008年。

鄭寿彭『宋代開封府研究』国立編訳館中華叢書編審委員会、1980年。

藤善眞澄訳註『參天台五臺山記 上下』関西大学出版会、2011年。

梅原郁『宋代官僚制度研究』同朋舎、1985年。

畑地正憲『宋代軍政史研究』北九州中国書店、2012年。

八木充孝「南宋地方財政の一検討」『集刊東洋学』44、1980年。

米内山庸夫『入蜀記』大阪屋號書店、1944年。

李天鳴『宋元戦史』食貨出版、1998年、全四冊。

林瑞翰「宋代監牧」宋史座談会編『宋史研究集』第14集国立編訳館、1983年。

氣賀澤保規『絢爛たる世界帝国』講談社、2005年。

氣賀澤保規『府兵制の研究』同朋舎、1999年。

藪内清編『宋元時代の科学技術史』京都大学人文科学研究所、1967年。

馮東礼・毛元佑著・軍事科学院主編、『中国軍事通史第12巻北宋遼夏軍事史』軍事科学出版社、2005年。

鮑翔麟「海塩出土宋朝軍印初探」『文物』1984年。

鄧広銘「北宋の募兵制度及其与当時積弱積貧和農業生産的關係」『中国史研究』、1980年。

林正才『守城録注釈』解放軍出版社、1990年。

B. アンダーソン著、白石さや・隆訳、『定本 想像の共同体』書籍工房早山、2008年。

ウルリヒ・ブレイカー著、坂口修平・鈴木直志訳『スイス傭兵ブレイカーの自伝』刀水書房、2000年。

ラインハルト・バウマン著 菊池良生訳『ドイツ傭兵(ランツクネヒト)の文化史』新評論、2002年。

〈以下、漢籍〉

『慶元条法事類』・『唐津疏議』・『清明集』・『武経総要』・『歴代兵制』・『虎鈴経』・『守城録』・『太白陰経』・『続資治通鑑長編』・『宋史』・『建炎以来繫年要録』・『宋会要輯稿』・『皇宋通鑑長編紀事本末』・『玉海』・『皇宋中興両朝聖政』・『群書考索』・『文献通考』・『歴代名臣奏議』・『新編皇朝大事記講義』・『中興小記』・『皇朝文鑑』・『皇宋十朝綱要』・『通典』・『続演繫露』・『鶴林玉露』・『齊東野語』・『曲洧旧聞』・『司馬文正公伝家集』・『東原

錄』・『北山集』・『雪山集』・『画墁錄』・『水心集』・『樂全集』・『歐陽文忠公集』・『韓魏公集』・『司馬光文集』・『雲麓漫鈔』・『入蜀記』・『參天台五台山記』・『梁谿漫志』・『清波雜志』・『包拯集』・『東京夢華錄』・『夢梁錄』・『嘉定赤城志』・『寶慶四明志』・『淳熙三山志』・『景定建康志』・『嘉定鎮江志』・『嘉泰會稽志』・『嘉泰吳江志』・『元豐九域志』・『咸淳臨安志』